

清時代の倣古の一様相

— 査士標「倣黄公望富春山居図巻」(東京国立博物館蔵) について —

都甲さやか (大和文華館)

査士標 (1615~98) は、明末清初の江南で活躍した文人画家である。絵画史においては、清初に成立した地方画派の一つ「安徽派」(「新安派」、「天都派」とも) の代表的画家として知られてきた。東京国立博物館が所蔵する「倣黄公望富春山居図巻」(重要美術品、紙本墨画淡彩) は、査士標の古画学習の実相、また後年に顕著となる、他の安徽派と趣の異なる淡彩表現を考えるうえで重要な作とみられるが、制作年の明記はなく、いまだ詳細な作品研究は行われていない。本発表では、本図の絵画表現と制作背景の考察を通して、おおよその制作時期を特定するとともに、査士標の倣古意識とその絵画上の実践を明らかにする。

「倣黄公望富春山居図巻」は、穏やかな江水と山々、水村の景を墨画淡彩で表す。画中の自題から、元末の文人画家・黄公望 (1269~1354?) の名作「富春山居図巻」(元・至正 10 年〔1350〕、台北国立故宮博物院蔵) の筆意に倣ったものとわかる。査士標は康熙 8 年 (1669) に、黄公望「富春山居図巻」無用師本を実見しており(「書画自賞」同 9 年〔1670〕、上海博物館蔵)、その後の数年間に、今まで見てきた様々な伝黄公望作品も想起しつつ、「倣黄公望富春勝覧図」(同 9 年〔1670〕、上海博物館蔵) 等、複数の倣黄公望画を集中して制作している。これは「富春山居図巻」の実見を契機として、1670 年代が彼の積年の黄公望学習の集大成期となったことを示しており、こうした当時の強い関心や絵画表現等を鑑みて、発表者は本図の制作時期を 1670 年代とみなし、考察を進める。

本図は、黄公望の「富春山居図巻」が墨一色であるのに対し、墨画淡彩で表されている点が注目される。それは「富春山居図巻」のみならず、自身の実見した伝黄公望作品、そして明の呉派文人画壇の領袖・沈周 (1427~1509) の「倣黄公望富春山居図巻」(明・成化 23 年〔1487〕、北京故宮博物院蔵) を資としながら描いたためと考えられる。

現存作品や文字史料等を鑑みると、1670 年代は、査士標がこれまでの墨の効果に重点をおいた画作を見直し、淡彩による表現に意識を向け始めた時期でもあった。特に倣古図においては、実見してきた古画、私淑する董其昌 (1555~1636) の提唱した文人画家の系譜をふまえつつ、明の呉派や董其昌、同時代の安徽派に通じる淡彩表現を適宜もちいて、各々の画家の画風を解釈しようという試みがみられる。本図もまた、そうした試みをしめす一作例であり、沈周倣本の淡彩を継承しつつも、より繊細な筆線と落ち着いた色彩感覚による安徽派風の山水様式で表され、査士標自身の古画学習と、画の系譜をなぞるような「富春山居図巻」として完成されている。したがって同時代の画家達が制作した、どの「富春山居図巻」臨模本や倣本とも異なる趣となっていることを述べたい。